

三河アララギ

平成二十五年

九月号

第六十卷 第九号



ニューヨーク日記(83) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

July 8, 2013 : North End Grill

Blue Shoe Diaries



美味しいもの食べた~って思って今日はバッテリーパークにある North End Grill に行ってきました。有名シェフの Floyd Cardoz はスパイスのマジツシャン。風味のバランスが凄いのよね!シェフのことをちょっと調べたら、インド生まれ、スイスの私が行った学校の姉妹校で料理の勉強をしたのに驚いた。面白く世の中狭いな~ってちょっと思ったな。

Craving for something delicious, I went to North End Grill in Battery Park for a great dinner. Being an admirer of chef Floyd Cardoz cooking since his days at Tabla, I did a little Googling on the chef to find out that he had gone to the sister school to my high school in Switzerland for hotel management and culinary school education. Pretty small world.

目次

第六十卷第九号(通卷七一七号)

表紙	ウバユリ
ニューヨーク日記(83)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
天つ日の	
赤玉石	
河鹿	
主治医	
一張羅	
施餓鬼	
孫には孫の	
螢の住む里	
暑い熱い	
七夕	
白隠	
暑い日々	
ピアノ協奏曲	
雨乞	
なつかしく	
世界遺産	
家族	
クワガタ	
半夏生	
振摺の花	
網戸より	
紫陽花	
日の出	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe		(2)
大須賀寿恵		(4)
岡本八千代		(5)
今泉	由利	(6)
青木	玉枝	(7)
弓谷	久子	(8)
佐藤	喜仙	(9)
内藤	志げ	(10)
安藤	和代	(11)
林	伊佐子	(12)
伊藤	忠男	(13)
胃甲	節子	(14)
鈴木	孝雄	(15)
近藤	映子	(16)
伊与田	広子	(17)
清澤	範子	(18)
半田	うめ子	(19)
足立	晴代	(20)
杉浦	恵美子	(21)
平松	裕子	(22)
山口	千恵子	(23)
小野	可南子	(24)
夏目	勝弘	(25)
秋山	逸穂	(26)
白井	信昭	(27)

灼熱の	
西瓜	
贈呈誌	
『ことよせ』	
『俳句』	
『かさね』八月号	
私の一首	
ある自然科学者の手記(16)	
絹の話(34)	
物理学者と詩歌の世界(44)	
短歌に詠まれた茂吉	
楽しい時間(10)	
新しい短歌革新とアララギの歌人(14)	
「鍼の如く」其の五	
「水魚」のことから(132)	
ことのはスケッチ(417)	
編集室だより(二〇一三年七月)	
和菓子街道(83)	
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

阿部	淑子	(28)
富岡	和子	(28)
いーはとぶ		(29)
植村	公女	(30)
一石		(32)
岡本八千代		(33)
近藤	映子	(36)
佐藤	喜仙	(37)
杉浦	恵美子	(37)
内藤	志げ	(38)
夏目	勝弘	(38)
林	伊佐子	(39)
弓谷	久子	(39)
大橋	望彦	(40)
今泉	雅勝	(42)
一石		(44)
鮫島	満	(46)
山本	紀久雄	(48)
佐藤	喜仙	(50)
夏目	勝弘	(51)
岡本八千代		(52)
今泉	由利	(53)
平松	温子	(56)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

この寺の仏華は青き葉の一式こもりしづかにけふも真夏日

P
54

夏の朝のあつき光の床に平ひらぶわが処置室のからす揚羽は

P
56

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

秋の空蒼しと思ふ時ありてわれのスモンも癒えつつあらむ

献立のカード作成委員の事務残して御用納めの式に出でゆく

六か月の定期券買ひていくばくか残りし財布をわがたしかむる

天つ日の

蒲郡 岡本八千代

天つ日の照り輝ける夏のけふおまへの祝ほぎの通知届けり

こんなにも嬉しきことのあるものかわが青年が妻娶るといふを

くれなるの百日紅咲くかたはらに今受けとりぬおまへの吉報

ま夜覚めて眠れぬままに塩飴の小さき一つを舐めてみにけり

上弦の夏の月夜の月あかり仰げばわれのみに光るごとくに

わが部屋の風通るみちに夏の夜風通りて風鈴の竹管の音

啄木の「小天地」の定価十二銭この本がわれの書棚にありつつ

読み始めし「おろか者たち」の本の中「もつとことんバカになれ」とか

文月の満月あはれそを見つつわが方丈のカーテンを閉める

「海の日」に海見にけふもゆかずして途中にて帰る己のふしぎ

赤玉石

東京 今泉 由利

左巻きのアサガオひと鉢加はりてまた続けゆく常の生活

遣唐使のもたせたりと牽牛花けんぎゅうかアサガオとして朝顔の市

夕立のあまり強さに逃げ込みし椎の木下に濡るるぐつしより

幾億年過ぎたる色か赤色の佐渡赤玉石雨に濡れある

池の面おも置き石伝ひにポイポイとアメンボーになりたるごとし

それぞれのルーツを垣間覗かせて青石赤石黒石御影石

緑青の屋根の下にてシャリシャリと音たてて食む亀戸大根

奥多摩の山の高きに畑して隠元ピーマン茄子葱とまと

一刀に一刀毎に香りたち檜の杵目彫りすすみゆく

朽ち果てし葉っぱの上つ方ウバユリの花は瑞々咲くよ

河鹿

新城 青木玉枝

伊丹を出で一年半の歲月はわが運命まで替えてしまひぬ

姪の世話施設に入所独居の部屋は冷房暑さ知らずに

体力の日び衰えてゆくを知る指の体操グーチョキパーと

ルソンの海に君は眠りて半世紀わが青春の初恋の人

入所日の二十二日は土用丑鰻さく亡^つ夫^まの手許なつかし

入所して独居の三夜眠りたり河鹿の声に涼風^{すずかぜ}うけて

団体の生活^{たつき}は顔も違うように一人ひとりの心はむつかし

わが子との背中合わせの縁とは日本文化も日び変りゆく

入所して湯舟につかり走馬燈一刻の安らぎ心身共に

わがひと世なんであつたか今更に不思議な想ひ人生それぞれ

主治医

豊川 弓 谷 久 子

我ひとり満足感に浸りをり漸く解きぬ漢字難問

あとは明日と思ひて読みさしの本閉じる時代小説厚き一冊

自転車の鍵開け兼ねる我を見て声かけ呉れし高校生のあり

血液の検査結果を聞く日なり主治医の前に少しかたまる

暑さを愚痴る私の言葉を聞き流し異常は無しと主治医の笑顔

伸びし髪今日こそ切らむと町に出る梅雨の明けたる猛暑の町へ

今年またみさとがすべてしきりをり夏の休みの一泊旅行

西浦と聞けば懐しアララギの短歌につながるあの人この人

萱草の赤き花摘みつつどこまでも田の畦行きし幼なき頃よ

ゲリラ豪雨水不足のダムニュース見て吐息つくより外に術なし

一 張羅

東京 佐藤喜仙

父の背に赤児は深く眠りをこの背が負ふる重荷を知らず

雨あがり不思議に思ふことひとついづこより湧けるでで虫の群

喫茶店入ればいつもソーダ水今はなつかし青春時代

水陰る三四郎池に椿落つ美禰子の気ままに青春ゆらく

炎昼に友の個展をたずねたる赤く描かれた巖島神社

水面の岸の緑を切り裂ひてあめんばうすいすいと楽しげ

山峡の月下の村に踊り下駄カランコロンとメルヘンのやう

この暑さ家に籠りてひたすらに読書に暮れる気分は避暑で

夏の夜の夢幻の螢にも生々流転といふ籬のあり

新社員大夕立に一張羅のスーツの裾をまくつて走る

施餓鬼

豊川 内藤 志げ

篁を抜き出す椎の枯枝にいつもの一羽今日は見えざり

明日からはゆつくり出来ると夕餉どきコップなみなみ焼酎ゆるる

深く吸いゆつくり吐きてゆく気管支拡張症のわがりハビリ

こつこつと一足ごとに階下る嫁の足音膝庇う音

なえなえと思ふ今日なり暮れなずみ百歩を歩まむ門道に立つ

施餓鬼にとオモダカコスモス小判草水上げよろしと友より届く

向日葵の黄一色いろに真向ひて夕かげ涼し至福の刻を

出席はきつと出来るよ必ず出来るロングスカートの裾丈直す

扇風機二つ回して気紛れに昼近くまで葱を束ねる

朝のうち葱を束ねる仕事ありわれに一番気持落ちつく

孫には孫の

豊川 安藤 和代

亡き母の浴衣解きをりホロホロと思ひ出遠く山鳩の啼く

名のあるに「おい」と呼びくる夫のゐてゆるりと過ごすこんな日もよし

孫には孫の言い分あるを思ひつつ今眠らんと寝返りをうつ

そして朝「ガンバリマス」と孫からのカタカナばかりのメールが光る

膝の痛み口には出さず家事をする見かけだけでも元気でゐたい

「帰るから」電話のあれば髭を剃りにこにこ孫待つじいちゃんがある

吾が胸に生き継ぐ母は百二才命日近し梔子香る

喜びの日びの続けば入道雲も入り陽もやさし梨の実光る

料理等知らず唯ただ煮物するお菜を孫はおかわりを言ふ

畑隅のすべりひゆにも花咲いていよいよ夏は盛りとなれり

螢の住む里

岡崎 林 伊 佐 子

ふる里に往復ゆききしながら老いふたり草刈りながら旧家をまもる

山の家にはひと夜とまりて夫と見るひとつふたつ迷ひ螢を

棚田にてわが子と螢を追ひし日を懐かしく思ふ奥三河の里

無農薬栽培畑にわれひとり草取り這へり暑き日暑き日

酷暑とも猛暑とも言ふ日々にして玉蜀黍のかげに身を寄す

キャベツ葉にひそみて酷暑をしのぎある天道虫に共感をよぶ

草刈りて野菜の根元に敷きてゆく乾燥保持する酷暑の日盛り

一人住む老婆に野菜を配りゆくことも楽しき生甲斐となる

蚊遣り火をいぶし草取る夕畑に渦巻き模様の灰型のこる

朝五時に血圧計り物を書く仕事始めるひとりの時間

暑い熱い

大阪 伊藤忠男

怪しげに紫映える紫陽花も砂塵が舞えば見る影も無し

神告げる丘の上から見下ろせば昔は煙り揺れる纏向

雨の中卑弥呼の葬儀有りや無し民の悲しみ残る箸墓

雨乞いに託す民の目幻が三輪山祈る鬼弥呼の姿

まだ夏の暑さに慣れぬ熱帯夜眠れぬままに鳥鳴く声が

古稀すぎて心急くとも焦れども過ぎゆく速さ変わりはしない

寝起きどきすすでに真夏日超えている昼恐ろしや暑さどこまで

雲一つ無き空見上げたため息を今日も暑さを耐えるのみかと

予報士の猛暑日告げる声すらもうつろなるかな出勤の前

病知り崩れかけたる我が心建て直せしは友の言葉で

七夕

豊橋 胃 甲 節 子

稲の穂に宿り煌く白露を盆に採りため七夕の用意す

七夕の笹飾り作りし八月の七夕の短冊に込めたる祈り

白露を硯にゆつくり墨をすり家族揃って短冊書きたり

白百合の一輪咲きて凜とした其の見事さに今朝は満たさる

水撒きて濡れて優しき露草の藍の二花活けて眺めぬ

干し物をしつつ見下ろす花壇にて今年最初の百日紅の花

夾竹桃の花咲く度に沁々と広島原爆忌の恐怖の事を

共に働き退職しても夏来れば貴女のメロンが繋げる友情

蝉の声朝あさ激し昼迄の吾が耳鳴りの紛るる裏庭

突然に頭上に轟く雷鳴に息止め静まる時を待ちをり

白 隠

沼津 鈴木孝雄

濡れ衣の講談を聴き白隠の改めて知る器の大きさ

白隠画の鷲頭山と志下の海画賛を学び山を目指さん

浜木綿の星形の花伸び伸びと花火のごとく天空に咲く

御用邸記念公園の浜辺にぼつりハマオモトその実どこより漂い着きぬ

ナスの花色薄くなり急ぎ追肥十日あまりで力戻りぬ

子供の頃畑で食べた赤いトマト色は出せども青臭さいまだ

帰り道トノサマガエルの大合唱宅地化進めど自然は残り

真夜中に樋を流るる水の音梅雨明け告げる大雨に目覚む

老いた母老人ホームに入居決まる親子の気持ちはひとつと云えず

孫の顔誰に似てると騒げども静かにしてと赤ちゃん言いたげ

暑い日々

名古屋 近藤映子

水無月の残り少なき日となりぬ雨傘持つて夫の元に

日一日と過ぎれば夫の余命は短く成り行く実感として

宵闇のベランダにダチュラ一輪は香りてをりぬ六月の末

我夫にもう七月よ七夕来るよと耳元に話しぬ

水無月に雨の少なし文月も雨の降らぬよ心配の有

わが夫を見舞い顔見つテレビ付け足をさするこの一時よ

我夫の発熱続き大病院に移転の知せに不安はつる

熱高き夫の赤き顔氷枕にて吾はジツト見みつめるのみ

わが夫の大望の孫身ごもりし息子のお嫁さんの笑顔を

お父さん！大事大事と熱有る夫の冷たき足を吾はさすりぬ

ピアノ協奏曲

豊橋 伊与田広子

ポリーニのピアノ協奏曲も加はりて眠けも覚めて夜を楽しむ

ポリーニは今は年取り思ひ出す坊やを膝に乗せている写真

東北や九州などでは洪水にわれの地方は全く降らず

乾燥に暑き日差の照り付けて小さき蜜柑や柿の実落つる

ホースにて庭に水かくる下には小さき青き実の落ちているなり

豊川のダムの水位は五割程水圧下げて節水呼びかく

建て込めし細き道より突然に視界広がり瀬戸内海に

堤防の上には数多の猫この猫に導びかれ来たと云ふ岩合

大き海老食はへたる猫追ひかくる横取りせんと三匹の猫

富士五湖や御殿場などの旅きまる楽しみに待つ暑き中にも

雨乞

春日井 清澤 範子

日まひして吾は一日伏しをりぬクーラー効かせ水分をとり

異常に暑き日の続きで雨乞の神事を行ふテレビ見てをり

公園の桜葉繁れる緑の中夫とブランコゆれてみるかな

雨乞ひの報道ありて三日程過ぎて雨降る台風の雨

菜園のもろ草俄かに伸び盛り鎌にて刈りて堆肥とせむよ

三人家族変ることなく時過ぎて今日は夏至なり猛暑日続く

梅雨は明け庭の椿は緑濃く葦簾よしず通してまぶしく光る

母さんは休めばいいよと台所より娘の声の暖たかきかな

喫茶にて娘と憩ふひとときに庭の千草の曲流れをり

楽しみとて夫の植ゑたる瓜トマト陽当りよろしき菜園に熟す

なつかしく

新城 半田うめ子

眺めつついちよう並木の浜松のサゴ―温泉へ香奈の心使ひ

孫加奈の運び来たりぬ土鍋にて味のよくして食品たのしむ

吾が家の風呂に入りたいと知らぬ人来たりて言ふ不思議なりき

なつかしく思ひ出すなり藤棚の下にて語りしやさしき友なり

今日も又慶華楼けいかりうにて味のよく中華の食品を食みてゐるなり

行き暮れて千種の森にて一夜過ぐ若き日なりき義母と二人にて

やさしきの杉浦様文学にて学びしともに思ひ出すなり

蒲公英たんぽぽの花数多に咲きをり西川の道辺を歩く楽しみにつつ

庭中まんなりように万両の花白くして数多に咲く楽しみてをり

世界遺産

東京 足立 晴代

池の辺へに九尾連つららなりかくれたる三尾となりし子がもかなしき

富士の山開きて皆の登りゆく世界遺産となりて嬉うれしく

高き峯残りし雪の富士の山気けだか高き姿世界遺産に

ころばれし友人ともびとの夫つま今いかに思いし前に夫婦揃いし

七夕を迎えし星空輝きて銀河にただずむ彦星織姫

七夕や笹に結びし短冊の一ひらごとに願ひをこめて

幼いとけなき日々にもどりて七夕の願ひむすびし笹のはそよぐ

越こしし方かたの善よきも悪あしきも今は早や楽しきことのみ想い出となりぬ

梅雨つゆあ明けて暑さに負めげず日々過すこす夕の涼風待ち望みつゝ

無病息災願いをこめて彫りし盆今しみじみと眺め入るかな

家族

蒲郡 杉浦恵美子

駅に夫が迎へに来たり我が送るそんな日常もう二度とない

望まぬに独りになりし我なれば家族の話題淋しく聞けり

夫と我とたった二人の暮しなりき家族にてあり今もかくあり

姿こそ見えぬが夫はこの家の此処彼処にぞ面影さやか

夏至過ぎて今年は早く梅雨も明け夫居ぬ三年目の真夏の炎天

嗚呼夫よこんな見事な入道雲共に眺めばどんなに素敵

入道雲独り見入れば夫と遇ふ遙か以前のわたしに還る

我が夫の散骨したる鍋倉山行くことあらじ写真に見入る

仏壇にぼつんと供へし缶ビール夫の嗜好を教へ子覚ゆ

このクルマ夫がこよなく愛したりそつとボディを拭き上げてゆく

クワガタ

豊川 平松 裕子

君の忌に咲きたる花よふくよかなる八重のくちなしにしばし向き合ふ

上り坂は天への道かと紛ふなり浜名大橋は未明の霧深き中

ひとしきりの激しき雨に流れ来し夏の落ち葉は門を塞げり

我が峡に蝉も蝸も未だ聞かず梅雨明けといふニュース聞けども

蝸も鶯も鳴く我が峡を喜びし人は思い出の中

疲れ果て横たはるとき窓に見ゆ月の明かりに青浅き空

雷の轟く雨に洗はれし大気の中に月は輝やふ

未だ日の昇らぬ朝の霧深き国道一号のバイパスを行く

車止めてしばし眠らむと来し寺に今年初めての蝉しぐれ聞く

いつ会ふかわからぬ孫に買いて来しクワガタはおが屑の中に潜める

半夏生

豊川 山口千恵子

朝の庭に凌霄花は散り敷けり遙かになりし人の恋しき

暮れ泥む緑あふるる庭の中半夏生の白き葉目立つ

つぎつぎと咲くべき蕾開きゆく緑の中の桔梗の紫

わが庭を自在に舞ひゐる揚羽蝶つひに止まりぬアガパンサスの花

夏の日にかけて遊びし蓬萊橋はるかな人を偲びて渡る

母の忌に墓に供ふるミソハギの花赤紫の小花寄りそふ

網のぼる青き蔓先天を指す雄花ばかりのニガウリの花

おづおづと鳴き始めたる熊蟬のなき声未だ長く続かず

毀たれしホテルの跡の草の原振花ねぢれて紅の花咲く

庭石にのぼり来たりしカナヘビは梅雨明け前の朝日をあびるる

振摺の花

豊川 小野可南子

きのふまで気づかず過ぎし振摺もじずりの花は菩提寺芝生の中に

見おとしの多きを気づくこの日頃振摺草は秀まで咲き満つ

明近く涼風の中天仰ぐ降るほどの星といふを諾なふ

星空のアルタイル・ベガもくつきりと大きく確かに私の視野

ゆるやかに燕の五六羽つどひ飛ぶ巢を離れたる兄妹はらからならむ

やうやうに明るくなりし茄子畑ハサミの音のしじまに響く

大井川の河畔の道ゆくバスツアー自づと会話はかの日かの人

大井川の広々砂洲になよなよと円かに咲ける虫取りなでしこ

トンネルに間もなく入るのしらせなり雄々しく汽笛の二度三度

蒸気機関車のひびく汽笛の度毎に窓を閉めむの条件反射

網戸より

豊川 夏目勝弘

庭石の根方に生ふるリユウノヒゲその細細を揺らす風なし

延べ段をジグザグ動く黒き点生き物なべてが潜む真昼間

茶の色の目立ちきにけりアジサイの花玉切り棄つ気力のたたず

植込みの緑葉ゆらすそその風網戸を通る風とはならず

雲少し厚くなりこし昼つ方垣の破れに野良猫の顔

玄関の戸を引き外に出づるさへいとふ真上の今日の烈日

生き物のなべてが日陰にのがれるむ空缶収集車が暑さ増幅

網戸よりの風を頼りに眠る日日今夜も目覚めて扇風機回はず

蝸の一声ありて十日経るあの一声は幻なのか

「紫陽花」

「招待」 秋 山 逸 穂

古いふるい原稿用紙見つけたり文字書き込めばにじみひろがる
石垣によこたう猫の白き腹はゆったりゆつくりと波をうつなり
枯れてゆく紫陽花の辺に蝉鳴かず熱き空気がかさなるばかり
公園の木蔭にあまた人がおり陽の射す原にいるは我のみ
川淵の木陰のベンチに休みたりうしろにせせらぎかすかに聞こゆ

日の出

豊川 白井 信昭

西浦の浜通り来て御前崎「万葉の小径」案内図に知る
引馬野の梅雨の間に間に暮れなずむ空に整然白鷺の群
夕刻がゆつくりゆつくりやってくる午後七時十分夏至のこの頃
本宮の続く山並ほのぼのと赤に染まれる日の出なりけり
向かいゆく日の出の方へ日の入りも宇宙のなかの小さき出来事

灼熱の

横浜 阿部 淑子

梅雨明けの知らせとともに灼熱の太陽燃えて人は茹^{うだ}りぬ

梅雨明けの早き利根川渇水し雨乞いの業力こもりて

真夏日の記録は伸びて水補給ジュースボックス売り切れ目立つ

日光に明るく真向くひまわりの揃いし顔は人間^{ひと}を弾^{はず}ます

どんよりと雲低き中子ツバメの待つ巢へ運ぶえさの尊き

西瓜

東京 富岡 和子

幼き日五人姉弟^{しまい}は皆はだか顔をうずめて西瓜をたべる

好きな花へメロカリスに揚羽蝶とび来て止まるとび行く彼方

濡羽色アゲハの蝶の静止する真似てひととき箒はなさず

日暮待つ月は中空西のそら三日月赤く猛暑のつづく

暑暑き真夏日日中夏期講座エアコン温度低く設定

贈呈誌

加納 久

石片のかたち鋭し瀬戸内の仙酔島にて拾ひたるもの

△愛媛アララギ 八月号 西村 栄子

△柊 八月号 山田 範子

ガラス戸に庭木の影のくきやかに没日は長くわが庭に差す

植物工場に育ちし野菜親しめず異様なるその瑞みづしさも

住田 鈴

南部 輝子

茂りみし庭木さつぱり切り込みて今日は夕陽がまぶしく射せり

ただに恋ひて来しふるさとよ母の畑ありしあたりは貝殻積めり

△鹿児島アララギ 七月号 福 伸 功

△群山 七月号 徳 山 高明

白衣脱げば直に母親の顔となり急ぎ帰りぬ双子のもとに

鳴る神のとどろきいつしか鎮まりて寒き曇りは雨を伴ふ

掘之口 ふさえ

平 館 卓次郎

拾ひたる風切羽に地紋あり朝々来鳴くトビのものらし

生ゴミを穴に埋むる一部終始鴉が電線に止まりて見てゐる

△高知アララギ 七月号 竹 崎 香 澄

鈴 木 秀子

言葉など忘れてもよい終の日まで吾を妻だと忘れないでほしい

△榎の木 七月号 ヘルベスの痛み無き日は街に出で桜餅買ふ義妹と二つ

宮 橋 敏 機

竹 下 祐 子

いくばくか娘と孫の思い出に残らんとして歌を作れる

朝の光深く入りくる季となり押入れ少し吾は開けおく

△冬雷 八月号 小 林 芳 枝

四日ぶりに研ぐわが指をすり抜けて水に遊べる二合の米は

『ハルよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

作曲家シベリウス好みしこのカフェ浮かびくるかな「フィンランディア」が
バルト海冬は凍れる海になると今日は夏海の波音を聞く
鈴木美耶子

ベージュ色に染め変へし日傘にさしてくる和らぎしけふの陽ざしが吾に
再びに学院生となりし私学舎の友らと長々語らふ
吉見幸子

福島に近づきつつある車窓には「全国のみなさん応援ありがとう」が
田植多終へし田は広々と続きゆくどこまであるのか福島和田よ
牧原正枝

新緑のまた新緑の奥三河いまだうぐひすの美しき声
洗たく物干さむとするに青き空思はず空に向かひて深呼吸す
岩瀬信子

空梅雨のわづかの雨に伸び出でし雑草の中の笹竹の緑
ご飯のみおぼえし幼はトコトコと我を呼びにくる「ゴーハー」と言ひて
石田文子

真昼間のベランダの日陰に横たはる老猫の耳音する方へ

潮含む風にむかひて歩みゆく鈍く光れる海の見えつつ

山崎 俊子

ひそと咲く鬼無里きなしの奥裾の水芭蕉夫と会ひたるかの日をおもふ
結縁けちえんの読経の響く本堂にどこからともなく涼風吹きくる

水野 絹子

八方尾根の旅終へて別るるホームにて手を握り合ひ二人の孫は
何よりも心育てよと願ひつつ別れむとする名古屋駅にて

牧原 規恵

蚊帳の中に螢飛ばしたるかの夏よ父若かりし母若かりし

「銀河」よりケンタウルスの露ふりしか里芋の葉に光る朝露

三田 美奈子

渥美より君はいっぱいの笑顔にて真っ赤なトマト届けくれたり
寂れたる西浦駅の待合に今年も子燕らのさへづりの声

稲吉 友江

『俳句』

神主の小さなあくび祭り前

植村公女

吟行の始まりの路白木槿

立葵路面電車の触れてゆく

愚かしや人の営み炎暑なる

一石

風鈴や廃炉の時代なるといふ

外界に熱を移して涼しとや

『かさね』 八月号

ビヤガーデン枝豆どかと置かれけり

佐藤喜仙

豊かなる蛇行の川や麦の秋

松本周二

サーファーを乗せて怒濤の波頭

古川千鶴

登校の白一色の梅雨晴間

川井素山

滝風やしぶきのこんな所まで

安藤虎醉

鉢植糸の花盛りなり夏の蝶

田島昭久

紫陽花の盛りあがる藍線路脇

米田文彦

十葉の花の眩しき退院日

小池清司

木隠れの人待ち顔や夏帽子

長久保郁子

雨上り揺るる葉陰に蝸牛

青木英林

雪吊りの雨に濡れゐる春隣

山本達人

どこまでも真直な道揚雲雀

岡野安雅

早暁の紫陽花光る雨上り

丸山酔宵子

幾霜に墓碑荒びたり栗の花

池内とほる

夾竹桃角の煙草屋代替り

小柳千美子

開け閉めの軋み卯の花腐しかな

橋本修平

通し鴨体を揺すり歩みけり

和田勝信

傘二つ動かぬままの花菖蒲

柳田皓一

尾根道の天空カフェの若葉風

森岡陽子

母と剥く蚕豆の莢ざる溢る

田中清秀

花菖蒲水に映せる花のいろ

吉田博行

ブレザーは兄の形見や更衣

長島清山

シャボン玉隣の塀も超え切れず

後藤克彦

私の一首

しろじろとゆれてをりけり隣家の杏の花の今年の花が

岡本八千代

杏の花が咲く頃になると、私は千晶ちゃん（教え子）のことを思い出す。連結歌として「北の窓開けたれば
淡々杏の花ああかの千晶との永訣の季よ」とも歌った。

彼女は私を慕っていてくれて、歌のやりとりもしたほどだった。私は旅行で軽井沢へ行った時、彼女と逢うことができた。何十年ぶりかであった―病氣らしかった。その一年後に彼女は天に召されてしまった。

逢うも訣れも杏の花の咲く季であった。

転院したる我夫は熱降り来れば吾をじっと見詰めぬ

近藤映子

療養病院に入院中の夫は高発熱にて緊急に大病院に転院した。経管栄養から点滴となったが、熱が降ると、夫はうつろな目ざしから、はつきりと私をじっと見詰めてくれる余裕が出来、ホットしする瞬間である。熱が降れば、又前の療養病院に、戻るが、もう点滴治療となれば、消化器を使わなくなるため、余命の期限が、かぎられる。こうして毎日見舞って、見詰め会う時間も限られて来たと思うと、物言わぬ、夫の目を少しでも見詰め会いたい。

武蔵野にふさはしき木といふならば誰しも上ぐるそは櫟なり

佐藤喜仙

武蔵野には落葉樹の森が多い。櫟は自生のものも多いが、昨今は庭木や防風林としても植えられている。寒空に枝をはる櫟、まぶしい若葉が萌えだす春、無数の青葉がきらめく夏、雨霰と降る晩秋の落葉。どの季節の櫟もすばらしい。現在武蔵野の櫟はいたるところで見られるがその第一は府中の櫟並木であろう。府中駅の脇の「馬場大門けやき並木」が大国魂神社まで続いている。その起源は千年前だとのこと。櫟に千年の風が吹いている。

美味しいと感じてちくり胸痛む食べずに逝きし夫を思ふと

杉浦恵美子

実は原作は「食へずに」でした。作品は作者を離れた後は独り歩きするものと思いますので、そのことをどうこう申し上げるつもりはありません。ここでは「食べずに」と「食へずに」の違いを考えてみます。「食べずに」の方は客観的描写で、それによって上の句も自己を観察しているような感じがし、「食へずに」の方は夫への強い感情移入があつて情緒的に流れてしまっているかもしれないですね。思わぬところで自作歌を再考することができました。

紫にまろまろ丸く露の臺今日は採らずに眺めて帰る

内藤 志 げ

柿の木の下に小さい数多くの露の臺が、今年は特に数が多い様に思う、たびたび見に行くのだが氣候の所せ為いか固いままになかなか緩んでこない。今日とは思って切れ物を手に行くがやはり眺めて帰る事になりました。

「今日は」の「は」を「も」にした方が正しいのでしょうか。

歌としては幾度も足を運んだ事を入れない方が良いのかも

黒ぐろと出でし庭土すがしけり枝よりモズが下を見てゐる

夏 目 勝 弘

荒れはてた庭を整備し、軒下で休みながら次の手順を考えているとき、雑木を草を取り庭土が黒ぐろと秋の陽を久しぶりに受けている。整枝した庭木の一本の枝にモズが来て、下の庭土を動かず見ていた。

いま作歌するに注意していることは、とりあえず作った一首から、不用のモノ（語句、文字、思い等々を削ること、次は真の写生ができているか、目に見えないものが正しく表現されているかの二点である。）

風が立ち杉の花粉が渡り行く春まだ寒き三月の山

林 伊 佐 子

早春、雄花は黄褐色で数個の枝端に群生、雌花も黄褐色の球果をつけます。三月の山に風がたち、山を渡る光景を縁側で休息している時に見つけました。三月の山はまだ寒く杉の花粉が山を渡るのは、平年にしては、早いと思えました。花粉の多い事も知りました。説明不足で一般の人達には理解に苦しむ一首かも知れません。推考ならずで平凡な一首になってしまいました。

ささやかに桃の節句を楽しまむ幡豆の海にて採れしあさりに

弓 谷 久 子

三月三日の朝突然魚と一緒にあさが届きました。娘の幼な友達がわざわざ早朝の魚市場へ行って買って来て呉れたものです。

子も孫も女ばかりの我が家では桃の節句は大イベントでした。毎年貧しいながらもおひな様を飾り、小皿に盛ったあさりもお供へしたものでした。何時の間にか忘れ果てていた桃の節句。久々夕餉の膳に魚とあさり、ささやかな我が家のひな祭りを子と二人で楽しみました。

ある自然科学者の手記 (16) 大橋望彦

『富士山のおこし』

歳を取ると夢を見なくなるとよく言うが、そのような事はない。80歳を過ぎても夢は見ると。それは、次元を超えて、若かりし頃に会った知己の人たちと話している夢が多い(既に亡くなっている方もいる)。多分、身体が思うように動かなくなり、若い頃、元気のよい状態への郷愁の念の表れなのであろう。それでも、思っても見たことのない情景が夢の中に出て来ることが偶にある。そういうのが仕事の上に何かのヒントと成ると佳いのであるがそう旨くは行かない。前後の關係などをサッパリ憶えていないことが多いから、話の続きがない。それでも役に立ったことが一度あった。夢の中に、身体の大きさよりも馬鹿でかい角を生やした鹿の姿が出てきたのを覚えていたので、そのような大きな、バランスの悪い角を持った鹿を彫り、『青年よ、大志を抱け』と、題したらば、直ぐに高い値段で売れてしまった。でも、そう何時も、柳の下に泥鰌は居るものではない。たとえ夢を見ても、作品に繋がるものは滅多にない。まあ、夢は夢でよいであらう。然し、夢が叶うというのは気持ちが良いことは確かである。どうやら、念願の富士山が世界遺産にようやく登録されることになった。『一富士、二鷹、三茄子』と夢見のよいトランプに挙げられるように言われているのだから、嬉しい。『登る馬鹿に、登らぬ馬鹿』で、どっちも馬鹿なのかも知れないが、富士山はそれほど日本人には親しまれていることは間違いない。これ、これで、銭湯の富士の絵は、世界遺産の絵に仲間入りした気分となる。

静岡県の御殿場に暫く住んでいたことがあるが、富士は大きい。近くからの富士だから余計にそう見えるのかもしれないが、兎も角大きい。ドツシリとした山容は見事の一語に尽きる。誰もが好きになれる姿である。『富士より大きな浪(神奈川沖波裏)』を描いた葛飾北斎の絵の壮大さも立派だが、『横山大観の『紅富士』』も、それを知る者にとつては、感激の一入と言え。富士山の雄大さは、近付いてみたり色々であるのは、近景との対比によるもので、その近景により色々である。柳沢峠(青梅街道の東京都と山梨県の境界付近)から眺めた富士山もその一つであるが、直ぐ近くの笹子山の雁の腹擦り尾根から描いた富士山が5千円札の図柄となつてもいい。また、5千円札の裏にも富士山は扱われているし、古くは、50銭(1983)札の富士は愛鷹山の富士(岡田紅陽撮影)と聞く。然し、一方で、引きの佳い富士もある。先の北斎の浪の絵もそうであるが、グーッと遠くに引いて観た富士山の姿の何とも言えない美しさはまた格別のものがある。各地に存在する『富士見町』の名の如く、遥かに望む富士山を讚える意味で付された名称なのであろう。さぞかし以前は富士山が良く見えたのであろうが、いまや聳え立つビルに遮られて少しも見えないのに名前だけが残っている所もあつたりする。それでも、東名高速の富士川のPA(パークینگ・エリア)から、裾野の綺麗な眺めの富士や、伊豆の戸田から海の島越しに眺めた富士等、沢山あり、引きの富士のよさは、各所に存在し、切りが無いとも言えるのであろうが、『借景』に近い感覚でもあるので楽しい。

小さかった頃には、JR千駄ヶ谷駅の近くに鳩の巣神社という八幡様があり、その境内に小さな富士山が造られてあつた。今でもあるそうだが、子供の頃だから其処によじ登り、鬼ごっこや、隠れん坊の格好な場所であつた。東京都内だけ

でもそのような「お富士山」は、数十箇所あるそうであるが、懐かしい遊び場であった。こんなことでも我々の身近に富士山は存在している。

富士山のようにドツシリと威厳を保ちながら存在感がある人間は、それほど多くは無いと思う。それは、その人の信念から由来するものかどうかは判らないが、少なくとも、考え方がブレ無いことはその条件の一つと言えよう。考えがブレ無いからと言って、強情で、偏屈な人は除外される。それでも、政治家などで、ある理念から、政治面での利得に関する信念を曲げずに主張を通す人がいる。その理念の善し悪しは兎も角として、信念を貫くことは大事であろう。その理念に関しては、選挙等でその人を支持する人たちが決めることで、殆んど多数決で定められることになる。万が一、思い込みの信念が、思い付きの理念に基づいたものであったらば大変なこととなる。これは無いとは云えない。例えば、その経済的な面から生まれた原子力発電の機構は、その安全性に関して極めて薄弱な状態にあり、その改善策に関して未だ議論百出の時に、政治信念に基づき、他国にその技術を輸出するという。科学者には全く理解の出来ない行動としか受け止められない。何故そのようなことが出来るのか。信念が強いと理性が隠れてしまうのか。信念には理論が無くてもよいからか。困ったことである。

科学の世界では、思いついた仮説を基礎的にその信頼性を固め、十分に立証できることの裏づけを得た上で、信念を持ってその証明に当たる。そのときには、ありとあらゆる手段で立証に努め、反論には正論で答える。科学者には賭けは必要ない。然し、少しでも不明な点があれば、試してみることは必要で、勿論、其処には失敗もある。これは、賭けに近いかもしれないが、一か八かという曖昧な根拠の基で試み

ることは許せない。厳密な条件が常に要求されているからである。もしも、間違いが判れば、どのような信念を以って行なったことであつても間違いを正す事にやぶさかでない。むしろ、それが方向転換の絶好の機会であると受け取ることすらある。政治もそうあつて欲しい。科学的基盤が定まらない状態の原子力技術は外に出す段階でなく、十分安全性について国民のコンセンサスが得られてから、胸を張って安全なものを提供するように出来ないであらうか。現在、科学者は、その代替になるエネルギーの開発に懸命になっているのではないか。これで原子力発電に関しては安全性が確保されたという結論を、今、出してしまったならば、科学者の立場は無くなつてしまう事が判らないのであらうか。それで国民は良かったと、納得するのであらうか。

富士山の周囲にはそうでなくとも騒がしいことが多く存在する。南海トラフも薄気味悪い動きをしているし、地震国日本での各所の危険性は常に念頭に入れなければならぬ状態にある。安全性を云々するならば、それらの条件下にあることも十分認識した上で、云わなくてはならないことぐらゐは、中学生でも常識となつて、誤解を招くようなことは絶対にして欲しくないものである。

富士山が世界遺産に登録された今日において、周囲に心配させるような危険物は置かないで欲しい。願うことなら富士山を怒らせて、噴火させるようなことをしないで欲しい。富士山とは、不二無二、即ち、唯一の、掛替えない山であり、それを持つ日本国に恥を欠かせないで欲しい。富士山のように、しっかりと地に付いた考えの基に政治を行つて欲しい。と、切に願うものである。

絹の話 (34)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

金繭、銀繭

〈金繭のデビュー〉

私がまぶしい程の金色をした繭を見たのは1994年長野県穂高で開催された国際野蚕学会にインドネシアから出品された、ヤママユガ科のクリキュラ蚕の繭でした。小さなピーナツの殻位で、網目状に繭が作られ、中が透けて見える日本の栗の木に付く栗蚕（一名透かし俵：濃茶色）の小型の様な繭でした。この繭は以前日本野蚕学会の調査団が絹が採れる未利用資源と認定し、インドネシアで地域興しとして、ジヨクジャカルタの王室の王妃様が出資され、日本から糸作り、織物の技術者が派遣されて、クリキュラ蚕の織物を作る事になり、短い間に素晴らしい織物を作る事に成功しました。

その後、京都で開催された日本野蚕学会にジヨクジャカルタの王妃様が王女様と来日され、特別講演をされて、晩餐会にも出席されました。この日ばかりは京都染織関係の方々で会場は溢れんばかりでした。そんな関係から

でしょうか、この金色の繭は日本の和装業界を中心に「黄金繭の絹」として販売され、しだいにシヨールやバッグ等も作られる様になりました。このサクセスストーリーがNHKの「地球に乾杯」と云う番組で二度も放映され知名度は一気に上がりました。

野蚕絹は世界各地の地域の地場産業が世界のマーケットに広がった例は有りますが、この金色の繭の様に下地の無い所から短時間で輸出産業になった例はありません。少し前までは、街路樹やキャシユナツツ、アボガド等の葉を食い荒らす害虫で困り者でした。一方で蛹が好んで食べられ、子供達の小遣い稼ぎに役立っていました。この状態を一変させたのが王妃様で、今まで蛹を食べ捨てられていた繭を糸にして、就労の機会を増やし貧困解消に役立て、繭を育てる植林を促し、環境保全に役立たいと云う目的が地域の利害と一致して見事に成功しています。

ところがこの繭の糸には泣き所が二つほど有ります。その一つは繭が網目状になっているので、絹の最大の特徴である長繊維が採れなく、紡ぎ糸しか作れないので、絹としての高級織物が出来ません。

また金色の繭を見た人は誰しも黄金の糸を期待しますが、糸を作る精練の過程で金色が失せ黄色の糸になってしまいます。絹特有の艶も今ひとつです。

柔らかな感触は一般受けしませんが、黄金色の繭から作ったと云う特徴が有りませんので、高付加価値が望めません。

この繭はインドネシアばかりでなく、フィリピン、タイ、インドなど東南アジアに広く棲息していますが、インドネシアの様に産業にしている所は他に有りません。地域で金の色合いが少しずつ異なります。

ヤママユガ科ですので細い一本の繊維に200を超えて他のヤマ繭より多くの孔が存在し、その孔の数も地域差がある様です。地域差による黄金色、孔等の関連は今後の昆虫機能の研究に大きなヒントになるかも知れません。

〈銀繭に驚嘆〉

金色の繭があれば銀色の繭はないだろうかと誰しも思っています。マダガスカルにアゲマミトレイ、アゲマミモザエと云う銀色をしたプラチナ繭と言われるヤママユガ科

の繭が有るのです。アゲマミトレイの大きさは今日の白い繭の3倍以上あり、形はへたの付いた小さな洋梨の様で、網目状に透けていて、まぶしく銀色に輝いています。

東京農業大学「食と濃」の博物館で開催する、私共のワイルドシルク協議会主宰による「ワイルドシルクフェスタ」の目玉として展示をしてみると、2週間で1万人余の見学者が来館しました。当然現地の映像を公開しながら、レクチャーの会を開催したのはいう迄ありません。

マダガスカル大使館に日参して、試験繭の輸入、その後の産業化等話し合いましたが、非常に収穫量が少なく、現地では1粒¥1,500で観光土産として売られていると言う事です、絹織物の原料としては、あまりにも高価なので断念せざるを得ませんでした。

またこの繭の糸は今日の家蚕糸(平均3デニール)の10倍〜30倍も有り、太すぎて衣服には向かないと思われます。銀色の正体はなんだろうか?作られるメカニズムは?そこに有用な利用価値が有るだろうか?今後の取り組みです。

地球上にはまだまだ知られざる繭が沢山有り、人類への利活用と云う面で興味が尽きる事は有りません。

物理学者と詩歌の世界 (44)

一石

ピーター・ヒッグス

ピーター・ウエア・ヒッグス (Peter Ware Higgs、1929-) はイギリスの理論物理学者。ニューカッスル生まれ。父親はBBCの音響エンジニアであった(参考資料1)。ブリストルの高校時代、同じ高校の大先輩の理論物理学者P・A・M・デイラック(参考資料2)に憧れ、数学・物理学に傾倒。1950年キングス・カレッジ・ロンドンの物理学科卒業、1954年に博士号を取得。その後、エディンバラ大学やインペリアル・カレッジ・ロンドンなどで物理学や数学を教えながら理論物理学の研究を行なった。1980年から1996年までエディンバラ大学の教授。現在は同大学の名誉教授である。

ピーター・ヒッグスは、「質量はどのようなしくみで発生するのか」という物理学における難しい問題に対するひとつの解決案を1964年に提唱した。ヒッグスの着想は、日本の南部陽一郎(参考資料3)による「自発的対称性の破れ」(注1)の考えに基づいたもので、後に「ヒッグス機構」と呼ばれることになった。この機構によると、万物に質量(重さ)を与え、宇宙解明の鍵を握ると考えられる素粒子「ヒッグス粒子」の存在が予言

される(注2)。

この「ヒッグス粒子」とみられる新粒子が2012年、スイスにある欧州合同原子核研究機構(CERN)の大型ハドロン衝突型加速器(LHC)を用いた国際チームの実験で見つかったとの報道があり大きな話題を呼んだ(注3)。

以下はヒッグス粒子にまつわるエピソードである(参考資料4)。

1) ヒッグス粒子を「発見した」ことを発表するCERNの会場にはヒッグスも同席し、「自分の生きている間にヒッグス粒子が発見されたことは嬉しい」とコメントしている。

2) ヒッグス粒子は、レオン・レーダーマン(1988年ノーベル物理学賞受賞)著の『神がつくった究極の素粒子』が元となって「神の粒子(God Particle)」という呼称でマスメディアに紹介されるようになった。最初、レーダーマンは長年にわたる探索にも拘らず姿を見せないこの粒子を「いまいまいしい粒子(goddamn particle)」という呼称で紹介しようとしたが、編集者の意向で却下されたという。ピーター・ヒッグスは、自分は無神論者であり、この「神の粒子」という呼称は嫌いだと述べている。なおヒッグス自身は、自分自身とこの粒子との間にしっかりと距離を置いた見方をしており、「ヒッグス

粒子」とは呼ばず、「so-called Higgs boson (いわゆるヒッグス粒子と呼ばれるもの)」といった言い回しを使う。

3) 似たようなメカニズムは、ブリュッセル自由大学のR・ブルートとF・エンゲレールも1964年に、ヒッグスとは独立的に提唱していた。

注1…基本方程式は対称性をもつのに、(そこに生じた基底状態の)対称性が自発的に破れる現象のことをいう。例えば、丸いテーパーの中心に棒を一本垂直に立てておく。テーパーの回転に対して回転対称性があるが、棒が倒れると回転対称性は破れる。エネルギーの低いより安定な状態を自発的に選んで落ち着く。

注2…137億年前に起こった宇宙誕生のビッグバン直後は、超高温の状態にあり全ての素粒子の質量はゼロで、光速で飛び続けた。100億分の1秒後、膨張とともに冷めていったある時点で「自発的対称性の破れ」の現象が起きて宇宙の性質は急変、宇宙空間はヒッグス粒子に満たされた。結果、クォークやニュートリノなどほとんどの素粒子は、ヒッグス粒子と衝突(相互作用)することで、「水飴」のように動くヒッグス粒子により)動きが鈍り、質量を持ったと考えられる。光子はヒッグス

粒子と相互作用しないので今も光速で飛び回る。

注3…大型ハドロン衝突型加速器とは、高エネルギー物理実験を目的としてCERNが建設した世界最大の(陽子ビーム同士を相互衝突させる)円型加速器の名称。スイス・ジュネーブ郊外にフランスとの国境をまたいで設置されている。全周は約27km、山手線を一周するほどの巨大なもの。陽子ビームの衝突点には、地下100mの地点に6階建てのビルに相当する観測装置を設置し、高エネルギー物理現象から生じる粒子を観測する。実験は09年に始まった。この実験では陽子同士をほぼ光速で正面衝突させて宇宙誕生直後の高温状態を再現。衝突でさまざまな素粒子が生成されるが、約10兆回の衝突事象の中からヒッグス粒子の痕跡が見つかるのは、たった1回に過ぎない。2012年7月、CERNは1100兆回の衝突データから「ヒッグス粒子とみられる新粒子を発見」と大々的に発表した。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Peter Higgs
- 2) 三河アララギ、第58巻、第2号、P 36 (2011)
- 3) 三河アララギ、第59巻、第5号、P 40 (2012)
- 4) Wikipedia, the free encyclopedia: Higgs particle

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十一 堀内通孝 2

「白桃」を幾時間して読みをはり呆けたるごとく夜
半にねむりぬ

「北明」昭和十七年

みこころの高く寂けきたふとさを今さらさらに思ひ
こそすれ

上ノ山の君がみ歌を読むときしこころは泣きぬ夜半
ひとりゐて

五十二歳の「白桃」の時を経て六十一歳の君はおは
すも

『白桃』は昭和八年一月から昭和九年十二月までの、
茂吉にとつては波瀾の丸二年間の作を収める。昭和八年
は、ダンスホール事件に発展する妻との不和が続ぎ、そ
の傷心を忘れようとするかのごとく柿本人麿の研究に没
頭する。翌九年は妻との別居、愛人永井ふさ子との不倫
が始まる。『白桃』には茂吉のその都度の心が詠まれて
いて、弟子ならずとも心を惹かれる。

一首目はこの年に発行されたこの歌集を一晚かけて読
んだことをいう。二首目は、「あわ雪のほどろほどろに

降るを見て心しづかにわが老ゆるなり」「こがらしも今
は絶えたる寒空よりきのふも今日も月の照りくる」「冬
木立いでつつ来れば原にしもまどかに雪は消えのこりた
る」等の、のちに代表作となる歌からくる思いをいう。

昭和九年一月から二月にかけて茂吉は、てる子を預
かってもらう下相談のために上ノ山で旅館を営む実弟高橋
四郎兵衛を訪ねた。その際の「上ノ山滞在吟」「続上ノ
山滞在吟」「谿」の六十九首に感きわまったことを詠む
のが三首目である。そこには、「人いとふ心となりて雪
の峡流れて出づる水をむすびつ」「みちのくの山を蔽ひ
て降りみだる雪に遊ばむと来しわれならず」「雪降れる
山に汗垂りわが心のこのくるしさを遣らむとぞおもふ」
などの絶唱がある。

四首目は、茂吉の五十一歳の時の歌を『白桃』に読ん
だのだが、あれからもう十年が経ったという時の流れに、
そして、茂吉が危機を乗り越えたことに心を動かしたこ
とを詠む。

鎌倉の浅山峡をもとほりし先生の歌妻に言ひたり

『北明』昭和二十一年

これは茂吉が昭和九年二月、三日間鎌倉に滞在して旧
作の推敲をしたときに詠んだ「鎌倉の浅山峡をとほり来
て白き砂丘は見えそめにけり」「悲しみてひとり来れる

現身を春の潮のおとは消^けたむか（『白桃』昭和九年）などに茂吉の悲しみが表れていることを妻に語ったというのである。

二年のあひだの事も語らむにまつうれし君少し雪焼
けして

『北明』昭和二十二年

白妙の雪の国べに老いたまふ命を守りて君のしづかさ

最上川の流れに向ひ君といこふこの日を待ちきこの
ひとときよ

最上川の岸の厚雪ゴム靴をはかせし君がみちびき給

ふ
町人の君に親しくいらへゆくこともかりそめと思ほ
ゆべしや

かくしつづつ時を惜しめり春の雪かがよふ上を君と歩
みて

「大石田」と小題のある歌である。『北明』の後記は次のように書き出される。

つい先頃、正確に言へば昭和二十二年四月十二日の夕刻、まだ宿雪三尺の山形県北村山郡大石田町に降りて、疎開先にその儘病後の養生をなすつてをられる、斎藤茂吉先生をお訪ねした。先生にお会ひしたのは山

形に先生が疎開される直前、すなはち昭和二十年四月五日であつたから、丁度満二年振りであつた。

これを読むだけでも右の前半三首にこもる作者の喜びが伝わってくる。このとき、作者は歌集『北明』のために序歌「春の雪山上に光をはなつとき君の歌よめばこころ足らへり」「最上川岸べの雪を踏みつつぞ君とかたらふ時をしてみて」「新しきこの歌巻よくらがりの今の時代にあかり持たなむ」の三首をもらっている。

このことについても作者の「後記」によって知ることができる。「先生からは、巻頭掲載の様な、身にすぎた序歌をいただき、まことに感激に堪へなかつた。（中略）雪の河原を歩いてゐても汗ばむほどの春の光が照りつけ、最上川の流に向つて休息する……そこで春近い雪国の風光をながめながら、いろいろと先生とお話ししてゐると、戦後はじめてと言つてもいい静かな欣びが、私の心に帰つて来るのがひしひしと感ぜられるのだつた」と。ところで、茂吉の『白き山』は昭和二十一年、二十二年の作を収めるから、堀内が大石田に訪ねたとき、茂吉は『白き山』の作品を作り続けていたのであり、自ら導いて作品の舞台を愛弟子に案内したことになるのである。『白き山』にはこの翌月の作として、「雪きゆる春風ふけば平よりわれを包みて白雲たちぬ」という歌が残されている。

楽しい時間 10

山本紀久雄

2013年7月31日

蔵市のいーとびあ「辻照子先生の料理とマナー」の7月テーマは「ビールで乾杯」ということで、料理実習に入る前、和田さんからよく冷えたコップ一杯のビールが出された。「わぁー、気が利く・・・」、歓声の声とともに「かんばーい」、全員一気飲み。今日も辻教室は大勢の参加で、人気と元気が溢れ、次の三品に立ち向かった。

①ザーサイライイス ②ゴーヤのリング揚げ ③ナスのグ
ラタン

いづれも夏らしいバーションだが、特に「ゴーヤのリング揚げ」に興味持つ。左写真
は自宅のゴーヤカーテン。今年
の春、自宅の建て替え工事が
完成した際、一階デッキの軒
先にフックをいくつか取り付
けたので、ゴーヤ苗を植えた
位置に合わせて、フックから
網を下ろしたところ、うまい
具合に成長し、満足するゴー
ヤカーテンができ、その上、
なかなか立派な実をつけてく
れる。

ゴーヤの右側に見えるのは、窓辺でのキューリカーテン、これも成功し、毎日「朝採りキューリ」に味噌つけ食べを楽しんでい。ところで、辻先生の新鮮な発想にはいつも感心する。ゴーヤチャンプルは得意料理だが、リング揚げ



は知らなかった。同じ料理班のメンバーも同様で、これは「初めてだ」と、辻先生の新鮮な発想に感心しつつ、積極的にゴーヤを輪切りにし、中のわたをくり抜き、180℃のフライパンに入れる。楽しい。

「初めてだ」といえば、先日、米国のウォール・ストリート・ジャーナル紙ワシントン支局のエディターが自宅に取材に来た。世界的に有名新聞社の幹部が、ワシントンからわざわざ来たのであるからビックリ・初体験である。

事前にメールで日程調整はしたが、どうして日本の個人家庭へ取材をするのかについては、詳しく連絡がなかったので、実際に会い、その背景を聞き、更にビックリした。それは自宅北側道路側に設置した左写真のエ



ネフアーム、この高さ1.8m、幅1.1m、奥行き0.5mの物体が世界にはなく、日本だけに存在しているという事実を、ワシントンから来たエディターから聞くまで知らず、それほどの価値があるものとも認識していなかったから、では何故にウォール・ストリート・ジャーナル紙ワシントン支局のエディターが自宅に取材に来たのか。他にもっと著名な家もあるし、立派な高級住宅もあるだろうから、当家に来るのは何か理由があるのだと、これを読まれている方は疑問を持たれずは。その通りで、お話しすれば簡単なこと。実は知人のウォール・ストリート・ジャーナル紙東京支局長夫妻が、先般、娘さんを連れて、建て替え後の当家を見たいと来た際、家の中を案内し、当然に屋根上の太陽光+エネフアームⅡダブル発電のシステムを説明済みで

あったので、東京支局長がワシントン支局に当家を推薦したのである。

だが、その時の東京支局長は「ああ、そういうシステムですか」という程度の反応しかなかったので、ワシントン支局から取材依頼のメールがあった時は大変驚いたわけである。

取材を受けるということはエネファームについて説明力が必要となるが、自分には難しい。というのも工事した住宅メーカーから、漠然と省エネになる、他の家でも採り入れていく。というような説明を受け入れ設置したので、詳しい解説は出来ない。そこで、東京ガスの「エネファーム使用説明担当」に來宅依頼し、改めて懇切丁寧・分かりやすい説明を受け、ようやく「なるほど」と理解した次第。

次に取材者が求めるのは、省エネの実態だろうと考え、昨年と今年の電気とガス料金を比較し、東京電力から入金となっている太陽光発電額も調べ、それを一覧表にしてウォール・ストリート・ジャーナル紙を迎えたわけである。

都内のホテルに宿泊しているというので、昼食を誘い、最寄りの駅に出迎え、サラダ・から揚げ・自慢の朝採りキュウリ漬け・天ざるそばを食べながら取材となった。

アメリカでも太陽光発電は、2011年の新規導入量は前年比76%増、2012年の新規導入量は世界全体の11%を占め、ここ数年で初めて10%を超えているように盛んである。

ところが、世界全体では2012年は前年比でわずか2%増にとどまっている。その最大の理由は欧州が23%減となったこと。アメリカや中国、日本が伸びる以上に欧州が沈み、このまま推移すれば、2013年の世界全体では11%減ると見込まれているという。

この背景には、欧州が高い買い取り価格を、電気料金に含

まれる賦課金などの形で利用者に負担させるので、産業界からは「国際競争力を脅かす」と批判が相次ぎ、一般家庭からも料金値上げに不満の声が出ている。アメリカではまだ欧州のようにはなっていないが、潜在的な問題としていざれ発生するのではないかと。その点、日本のどのような状況なのかを調べたい。これが第一の取材目的である。

第二取材目的は2013年6月7日の日経新聞記事で、「積水ハウスがゼロエネルギー住宅『グリーンファーストゼロ』の売上が好調で利益増」という内容。この記事を読み、ゼロエネルギー住宅とは何か、ということに関心を持ち、大阪の積水ハウス本社へ訪問したところ、ここで初めてエネファームの存在を知り驚き、積水ハウスから紹介受けた川崎の住宅に訪問、その翌日に当家に來たのである。

このエディター、ワシントンにいたのでオバマ大統領を訪ねる各国首脳と接する機会もあり、今年二月の安倍首相訪米時の記者会見で質問するなど、世界の情報には詳しい人物。当然に日本の外交官などにも会う機会があるが、エネファームが話題になったことはないという。「究極のエコカー」と呼ばれる燃料電池車の量産時代に向かって、日米独自自動車メーカーが鎬を削る競争をしているが、同じ原理を活用したエネファームが、既に日本で普及している事実を知らなかったといい、日本人は何故にこのようなシステムを世界にPRしないのか。そこが分からないと何回も発言する。その通りで、世界に先駆けて日本が開発したものを伝えていくのは「楽しい」こと。関連業界は大いに協力し海外へエネファームを普及させてもらいたい。今回取材の掲載記事が届いたらこの紙面で紹介したい。楽しみだ。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (14)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書―第三回―

今回の要旨

① 歌よみは馬鹿でのんきもの

② 俳句に調べはないか

① 歌よみは馬鹿でのんきもの

冒頭「歌よみの如く馬鹿な、のんきものはまたと無え候」と喧嘩調である。たまたまかけて、歌よみは歌が一番と思つているが、それは歌より外のものは何も知らない単なるぬぼれであると決めつけている。俳句と川柳の区別もわからず、漢詩、西洋詩も読まず、まして小説や戯曲が歌と同じ文学であるという認識は全くない。俳句、漢詩、西洋詩、小説、戯曲はそれぞれ和歌にはない長所を持つてゐる。歌よみはとかく三十一文字みそひとを並べさえすれば、根拠もなく俳句や漢詩、西洋詩に優つてゐると頭から思いこんでゐる。歌よみの文盲浅学、浅見には今更のようにあきれかえる。

② 俳句に調べはないか

歌よみの中には和歌には調べがあるが俳句にはないので、和歌は俳句よりすぐれてゐると唱えるものがある。これは調べというものを誤解してゐる発言である。平和な長閑なさまを歌うにはなだらかな長い調べを使い、悲哀とか慷慨とかの情の迫つた時、または景象の活動が甚しく変化の急な時には迫つてくる短かい調べを使ふことは論ずるまでもないことである。だが歌よみは調べは総てなだらかなものと思ひ込んでゐる。なだらかな調べが歌の長所なら、迫つてくる調べは俳句の長所である。賀茂真淵は雄々しい歌を好んだようであるが、実作を見るかぎり雄々しく強いものは少なく、実朝の歌の雄々しさ、強さをしのぐ歌は、真淵には一首も見あたらない。

このように歌よみ批判が厳しい口調でなされてゐるが、最後に自分は歌に関しては局外者とか素人といわれたいが、歌に關しては信ずる所を持つてゐると述べてゐる。もし以上の論に異論を持つ方がおれば、三日三夜をかけてでも議論をしたいと思う。熱心さにおいては決して他の歌よみに負けないつもりだが、感情が高ぶつて筆が走りすぎて失礼の所があればお許しただきたいと結んでゐる。

「鍼の如く」 其の五 夏 目 勝 弘

(八月十四日より十二月八日)

「詞書」八月十四日退院

○朝顔は曇もて偃へれおもはぬに榊の枝に赤き花一つ

「詞書」十六日朝、博多を立つ、日まだ高きに人吉に下車し林の温泉といふにやどる、暑さのはげしくなりてより身はいたく疲れにたりけるを俄かに長途にのぼりたることなれば只管に熱の出でんことのみ恐れて

○手に當て、心もとなき腋草に冷たき汗はにじみ居にけり
宮崎を経て鶴戸そして油津へ九月二日に飢肥に着く、この間に十二首を作る。

「詞書」六日、波荒き海上を折生迫の漁村にもどる。此夜おもひつゞくることありてふくるまで眠れず

○草に棄てし西瓜の種が隠りなく松虫きこゆ海の鳴る夜に
(この一首には心の乱れを感じてならない)

「詞書」二十二日、博多なる千代の松原にもどりて、また日ごとに病院にかよふ

○此のころは浅蜷々々と呼ぶ聲もすゞしく朝の嗽ひせりけり
(九月二日油津より二十二日の間折生迫あたりを巡ぐり十三首を作る)

九月六日には手紙(絵はがき)を六通出す。そのなかに平福百穂あてに(歌はもう作りません残念ですがすっかり出来なく成ったのです)と、手紙の多くは当地の氣にいった絵はがきを買う、多いときは三十枚を買ったとある。

「詞書」十月一日、庭のあさがほけさは一つも花をつけず
○朝顔の垣はむなしき秋雨をわびつ、けふも復たいねて
あらむ

(十月の歌は七首のみ)

「詞書」十一月一日、次の日、熊手もてくまなく掻きはらはれたれど

○白菊のまばらぐはおもしらくこぼれ松葉を砂のへに
敷く

「詞書」十六日、このごろ熱低くなりたれば、始めて人をたづねていづ、空晴れて快し

○不知火の國のさかひにうるはしき背振の山は暖かに見ゆ
(この月は体調が良くなったのか、出歩くことも多く二十首の歌が出来た。)

十二月八日には
○朝まだき車ながらにぬれて行く菜は皆白き茎さむく見ゆ

(この一首が「鍼の如く」の最後の歌である。)

(この後五首が載っているが大正三年六月の旧作である。)

「鍼の如く」より歌と詞書を書き出し、手紙、年譜等を記しその背景から一首一首を感じてみた。

父母への手紙は、送金のこと耕作手帖に書いてあるようなこと、地図等を送ること、地図などは、どのの棚のどこにどのような包に入れてあるまで記してある。衣替の時などは洗い張りの有無、送った包紙を使って次の物を送ってほしい等、微に入り細にわたり書いてある。

作者が一字一字書いたことを、写し書くことで少しでも作者の思いに近づきたかった。

真の写生とは、少しは捉めたと思うが、実作までには時間がかかる。

仕事人を追ったテレビで、プロとは何かという間に、(見えないモノが見えること)と答えた職人がいた。これが真の写生に繋がるヒントだと思った。

「氷魚」のことから (152) 岡本八千代

ま夏日の日照りの中、自生えした百日紅の花があかあかと咲きつづいている。細い丈の短い幹なのに、燃えているかのように。――。

子規の「曼珠沙華」の花の色のように。

七・野村（玉枝の）家内のこと。

結婚の荷物（箆箆幾竿、長持幾竿、釣台幾つ等々と、引き渡す宰領、受け取る番頭、がやがやと大騒ぎの様子。花籠を負った少女が、横町の角からそろりと現れ出た。しかし、花売りがこんな処へ来ているのは？と門の外へ出されてしまう。

八・ついに玉枝の結婚であった。

・少女は玉枝の他の人との結婚のことを知り、その泣き声は絶望の調子であった。

・少女は様子見をしたかったが園丁（庭作り）の人にみつかつて、追い出される。花売りは倒れて追い出される。

九・野村の奥座敷——めでたく三三九度がすんだのであった。

・玉枝は、自己はなぜ結婚した？と苦しむ。また現在を如何する積りか？とも。

・玉枝は妻を殺そうと決心した。妻は寝入っているようす……だが、すると外から、「アレー」という叫び声があった。玉枝は思わず屏風の後ろへ隠れた。

十・外は未だ吹いたこともない大風であった。

・花売りが桔梗の紋の蔵を覗みつけたその夜、玉枝が花売りを捨てて何某と結婚したその夜半すぎに起ったことだ。
・玉枝は、「みいさん」の名を呼びながら、庭に出て、暴風雨の中を走っていた。

・二・三人の人が、うつ伏せの玉枝に近づいた。

・三人——一人は大狗の声で、「大将塚の老木はどうだ」とか、今度は木の葉天狗の声で、「彼らは煩悶しているから今の内に苦患を絶ってやる方が功德で……」などと言ひ、笑い出した。風も水も木も草も一時に笑い出した。そして通りすぎていった。

・それがすぎ去ると、今度は女性と思われる人が来た。

十一・玉枝が再び眼を開いた時は、我家の座敷の隅に蒲団を着せられて内の者誰彼と取り巻いた中で寝ている自分を認めた。玉枝は夜になると熱が高まっつてうわごとをいうのが例であった。「それ、金の蛇が屏風の後へ隠れた」「あれ書院の庭の枝折戸の処で女の泣声がある」——

・「ここに不思議なるは去にし夜の野分はげしかりし後、眼の丸い女花売の桔梗刈萱というやさしい声を聞いた者は此町に一人もいない、同じ仲間の花売さえ其の行方を知らぬという事であった」(原文)
ここでまずあらずじを了えた。

(明治30年、9月〜10月稿が了り)

ことのはスケッチ (417)

今泉 由利

『グレート・ジャーニー』 ③

地球の上で、私の女の子が自分の力で生きてゆくように：そのためには何をしなければ：

まだ、わけも分らない幼子連れ、アルゼンチンの大パタゴニアを見せることにする。

○プエルト・マドリンまでは飛行機でゆき、「そぐそこ」と言われ、車に乗った目的地は、一日がかりのデコボコ道、不毛に見える草原を、ニヤンドウ（ダーウィン・レア）が遠くに見え、近くはバタバタ車に伴走（？）する。グアナコ（リヤマより小さい）と目が合う。ブッシュには限りなく土着の動物達がいるだろう。本物のパタゴニアを走り、大西洋に面したバルデス半島へ。

巨大な象アザラシがゴロゴロドテンと群れて、その頃は柵も無く、どんどん近付けた。でも大変。ペチャンコにされてしまう。オタリオの群。海には、大きな背鰭が見える。

また車の移動。プンタ・トンボへ。マゼランペンギンの群棲地。ペンギンとは氷の雰囲気居るものと思っていたのに、海に続く牧場、夥しい穴が開いている。ペンギンの巣なのだ。五十万羽はいるという。馬や牛がいて、ペンギンがいて。灌木の木陰にもペンギン。ペンギンくらいの大ささだった私の女の子が、ペンギンと走る。ペンギンにつつかれそうになる。

○アンデス山脈の麓、サンマルティン・デ・ロスアンデスへ。ブエノスアイレスから、ベビーシッターのマルガリーターもスキーの道具も当人達も、みな積み込んだのドライブ。子供達に、スキーを経験させる試み。

パンパスを走っているうちは快適だったけれど、アンデスの山にわけ入るあたり、雪が降りはじめ：どんどん積る。運良く咄嗟のホテルに避難出来たけれど、しばらくは雪に閉じ込められ動けなかったのだ。

それでもようやくスキー場に辿り着き、季節が異なるヨーロッパや暑い国のオリンピック選手達がトレニンクしている雰囲気、私の小さな女の子達が、最も小さなスキー板でチョロチョロしたのだった。

帰途、国立公園の中、おとぎ話のよう、それはそれは美しいキラキナという小さな町に寄る。リングの木が生えている土地を売っていたから、買ってしまった。日本にすぐ帰れるように、安心の預金を全部叩き。

○パタゴニアの入り口、サンカルロス・デ・バリローチェにもスキーにゆく。

森と湖と雪と山と空と空気と：神々しいほど美しい。ウオルト・デイズニーの「パンピ」が出来たマラジャーネの森もある。湖の辺にロサ・モスチータの実が赤く、ジャオジャオホテルの朝食のジャムになっていた。

この国際的なスキー場で、私の女の子達が、小さなスキーですべり降りてくるのを見るのは、とてもうれしかった。

つづく

編集室だより【二〇一三年 七月】

- 「絹の話」のテレビ企画。有楽町シルクセンターに於て。日傘から靴下まで…、全身を絹で労働することが出来る絹製品を探しにゆく。
- 上野不忍池の蓮事情を、今年は、ことさらに大きな葉が出揃い、蕾がすくと立つ。ひと花、ふた花、咲きはじめた。
- 「科学にすぎるな！」佐藤文隆氏の宇宙と死をめぐる特別授業「読んでみようか」と思われまじたらお貸し致します。申し出て下さい。
- 印刷所の桜創美社長日向氏に、三河アララギ八月号より四ページ増やすお願いをする。心良く受けて下さる。
- 柳橋、隅田川沿い、旧市丸邸に於て、水神様をおなぐさめする「川開き」が開かれた。川風のもと、古きにタイムスリップしたのでした。
- 仏像彫刻の一番始め。鉛筆より少し太い程のヒノキを仏具に彫る。一刀ごとヒノキが香り驚く。「一年間は基礎です」といわれることを諾う。
- 「花守」の七月決算。会計さんと税務事務に励む。
- 「辻輝子先生の料理とマナー」。お客様を持って成す心遣い、支度、講義。料理の実技はビールに合う料理、ゴーヤのリングフライ、ナスのグラタン、ザーサイごはん、さっと作ってしまい、沢山ビールを飲み、沢山話しが出来た。
- 国立西洋美術館、「ピカソが描いた動物たち」ピカソの描いた線と、ずつとずつと一緒にいた。
- タンゴの友達と、中野にある「MY/WAY」へ。マスターの弾くピアノでタンゴを歌う。懐かしい歌を歌う。素敵なスペース。
- 近くの「朝顔市」。朝早く、朝顔の花だけ咲いている。昼間には、明日咲く蕾だけ。ユニークな市。
- 池之端、ライブ・スペース・Q.U.I.に於てユリ・アスセーナさんのタンゴリサイタル。親しみ深く、正確に楽しく歌われて、大好きな人となる。
- 奥多摩の山河にアーティストを訪れる「アート・クラフト・フェアレーション」「おくてん」開催のための総会に出席。
- 31の会場、43の「アート」の中の一つに参加するため。九月一ヶ月の、土・日曜日に「鹿の木彫工房 悦鹿」において、今泉由利の「クロッキー」コラボをします。是非、お出掛け下さい。
- 詳細は、今泉由利ケータイ0901843418646 お訪ね下さい。
- 清澄庭園の吟行。東京はゲリラ雨の最中にもかかわらず、吟行一行には楽しむ程の雨でした。日本各地の名石を置く庭園。石に目覚めた。庭園内の涼亭での納涼会は、お殿様になったような素晴らしさでした。
- 炭酸ガスレーザーによる、5ミリ程のホクロを取った。レーザー熱で殺菌、止血。縫合の必要も痛みもなし、軟膏をぬって終了。医学の進歩に感謝。

和菓子街道 (83)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(6)

ひなびた町ながら、これはという老舗が何軒かあってつい長居をしてしまった神戸をあとに、次なる宿場町の白子を目指す。

江戸時代、伊勢街道一帯の名だたる問屋や廻船業者、伊勢型紙売の商人が多く活躍した商人の町、白子。街道に面して建つ菓子屋の大徳屋は、もともと白子湊を出入りする廻船のために朱印を押ししたり、取締を行う役目を担う、いわば海運会社のような存在だったという。紀州藩御用商人として、享保年間(1716～1735)に紀州の殿様に随行して京に上った際、頭に柴の束を乗せて売り歩いた大原女と呼ばれる女性の風情にヒントを得て、柴束に似せた菓子を考案。それが、「大原木」という菓子だ。

その後、大徳屋は紀州藩御用達の菓子司として、明治に到るまで藩



しっとりとした生地で餡を挟んで畳んだ小原木。

に菓子を献上した。小原木は、今では白子名物として定着している。

京の思い出にと作られた菓子に、伊勢白子で出会うとは。菓子を通じて旅の上に旅を重ねているようで、おもしろい。これも旅の一興だ。

◆大徳屋長久

住所：三重県鈴鹿市白子1丁目6-26

電話：059-386-0048

お知らせ

▽十月号の原稿は、九月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△尋常ではない今年の暑さ、やっと八月号の発送を終えて、息ついたところです。

会員の皆様、私も含めて高齢の方々が多くなりました。熱中症にならないように呉々もお気をつけください。

この暑さにめげず会員の皆様方のいきいきとした短歌に私も元気をもらえる校正、発送でした。只ひとつお願いがあります。原稿用紙に大きな文字、楷書で書いてください。そして濃く書いてください。私達も目が疎くなっています。(小野)

△会計から報告

過日六月二十二日亡き伊藤八重子様の御家族から、八重子様の三河アラギへの厚い思いをお届け下さいました。八重子様の遺志としての御寄付です。ありがとうございます。

三河アラギの発行費として活用させていただきます。ここに御報告申し上げます。(会計小野)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年八月二十五日印刷 第六十巻 第九号
平成二十五年九月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

平松 裕子・山口千恵子

発行人

今泉由利

発行所

三河アラギ会
〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

URL

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美